認定特定非営利活動法人
柔道教育ソリダリティー

「暴力の根絶」プロジェクト パネルディスカッション

2013年7月14日(日)
品川プリンスホテル
メインタワー10階「ムーンストーン」
主催：認定特定非営利活動法人
柔道教育ソリダリティー
後援：朝日新聞社・公益財団法人 全日本柔道連盟

ー はじめに

コーディネーター：宮嶋 泰子
（㈱テレビ朝日 編成制作局アナウンス部兼
編成部上級マネージャー）

皆さまこんにちは。今日は暑い中、足をお運びいただきありがとうございます。皆さまの熱意に応えられるよう一生懸命コーディネーターを勤めさせていただきます。

今日のテーマは「暴力の根絶」プロジェクト始動！ ということで、主催は山下泰裕さんが理事長である特定非営利活動法人柔道教育ソリダリティーです。朝日新聞社ならびに公益財団法人全日本柔道連盟の後援をいただき、本日のパネルディスカッションが実現することになりました。

実は私、長い間スポーツを取材していて、この1、2年の間は本当に悔しい思いばかりしていました。特に、2011年12月に柔道の金メダリストが性的暴行をはたらいた行為では、なかなか眠れなくて苦しくて夜中に目を覚ましたおぼえがあります。さらに、今夏には女子柔道強化選手への、全日本女子柔道監督による暴力行為が発覚しました。これは柔道だけではなく、日本の様々なスポーツの暴力や学校教育での体罰を含めて、スポーツ界の体罰・暴力は社会問題にまで発展しています。今日は、そうしたことを踏まえて、なぜ日本のスポーツに暴力が付きまとうのかを考えてみたいと思います。

女子柔道強化選手による全日本女子ナショナルチームの暴力告発問題を契機に、全日本柔道連盟は第三者委員会の提言を受け、2013年3月21日に「暴力の根絶」プロジェクトを立ち上げました。そのプロジェクトリーダーに山下泰裕さんが就任しました。4月15日でしたか、この日から私たちは毎週講道館に通い、どうすれば暴力を断ち切ることができるか、一日に3時間に及ぶ議論を重ねてまいりました。今日はそれを少しでも知っていただくために本シンポジウムを開催する運びとなりました。

ここで会場にお越しの皆さまに、ご協力をお願いします。これまでに、スポーツの場面において自分で暴力をふるったり、あるいはその現場に出合ったことのある方は「緑色」の用紙を、全くない方は「黄色」の用紙を上げてください。

足が震えています…。3分の2ぐらいの方が「緑色」を上げています。では、今まで暴力を見聞きしたことのある方は「緑色」を、まったくそういう経験のない方は「黄色」を上げてください。

（…ためいき）大変残念なことですが、私がここから拝見していて、「黄色」を上げた方はわずか二人だけです。暴力は、なぜ起こり、どうすればなくせるのか。さっそく、お三方に基調講演をお願いしたいと思います。最初は柔道教育ソリダリティーの山下泰裕理事長です。

柔道界における暴力根絶に向けて

山下 泰裕
（全日本柔道連盟理事（当時）・「暴力の根絶」プロジェクトリーダー、NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長、東海大学副学長・理事）

NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長の山下です。本日はお暑い中、多数の方にお集まりいただきありがとうございます。今回のシンポジウムでは、柔道界、スポーツ界でどうやったら暴力を根絶できるのか、皆さんと一緒にこの問題について考えていければと思います。

先程、コーディネーターの宮嶋さんからもお話がありましたが、柔道界においては暴力だけでなく様々な不祥事が発覚しました。このことに関しては全日本柔道連盟（以下、全柔連）の理事の一人として大変責任を感じています。大変申し訳なく思っています。

6月30日の全柔連常任理事会ならびに評議員会では全理事の解任に関する動議が提出されました。理事の一人として信頼回復に向けて全力を尽くしていきたいと思っています。一連の不祥事について重ねて、おわび申し上げたいと思います。

本日は、NPO法人柔道教育ソリダリティーのメンバーでない方も多数お見えになっています。そこで、私たちの活動を簡単に説明したいと思います。2006年4月に、この法人を立ち上げました。「ソリダリティー」という言葉は、日本ではあまり聞きなれない言葉ですが、ポーランドのワレサ議長が演説で「ソリダリティー(連帯)」を連発して叫び、世界中で有名になりました。新渡戸稲造の『武士道』の英文にもこの言葉が出てきます。

柔道教育ソリダリティーの活動の中心は、柔道を通じた国際交流活動です。もう一つは、柔道少年の健全育成です。こうした様々な活動を通じながら、「柔のこころ」「和のこころ」「日本のこころ」を世界に伝えていきたいと考えています。毎年、6月と12月に講演会を開催しています。最近では、昨年の12月7日にスポーツジャーナリストの長田渚左さんを講師に迎えて「平和でないとスポーツはできない」をテーマに開催しました。実は、柔道界の不祥事があって、今年6月の開催は取り止めになりました。これに代わって、本日のシンポジウムを開催することになりましたが、6月の全柔連評議員会を経てからでないと実施することができませんでしたので、今回は7月の開催となりました。

資料の中に、「私の道」という記事があると思いますが、これは私が読売新聞神奈川版に5回にわたって連載したものです。本日のテーマである「暴力の根絶」にも触れていますので、配布させていただきました。二つ目の資料は、3月21日に立ち上げられた「暴力の根絶」プロジェクトの4月15日から始まった議論をまとめたもので、6月の理事会に提出し承認された内容です。三つ目は、女子柔道強化選手がJOCに告発し公表された内容です。それともう一つは、神奈川県の体育協会、教育委員会と合同で主催したもので、県内の中学、高校の運動部の指導者らを対象に、「部活指導のあり方と暴力行為根絶に向けた集い」と題して開催された記事のコピーです。約400人が参加して、「暴力の根絶」に向けて活発な意見交換を行いましたので、参考資料として提出させていただきました。

さて、本日の私のテーマは「暴力の根絶」プロジェクト始動、ということですので、これまでの取り組みを紹介しながら、会場の皆さまとどうやったら暴力を根絶することができるかを、一緒に考えていきたいと思います。

まず、1月29日に公表された告発文から。これを契機に全日本女子ナショナルチームの園田監督が辞任することになりました。その後、前強化委員長強化担当理事の吉村氏が辞任しました。こうした一連の辞任を受けて、全柔連が第三者委員会を立ち上げ、第三者委員会から全柔連に対し、3月12日に報告書が提出されました。この中に「改革への提言」というものがあります。そこで「全柔連の責任者自身が、内外に対して暴力の根絶をきっぱりと宣言すべきである」と明記されたわけです。この提言は、3月18日の定例理事会において採択されました。私個人としては、「暴力の根絶」に関しては、具体的な取り組みを示さなければ、ますます柔道界の信用は失墜すると考えています。しかし、この日の理事会では残念ながら具体的な内容については議論されませんでした。

次に、内柴正人氏の不祥事ですが、これは全柔連のみならず日本の柔道界の信頼の失墜につながったと思います。不祥事が起きてから、私のところへ色々な苦痛の叫び声が届きました。現場で熱心に柔道の指導に取り組んでいる方々からは、「新規の加入者はほとんどなくなった」という嘆きが聞こえてきました。こうした中で、「私に何ができるのか」という自問を繰り返し、「暴力の根絶」プロジェクトを立ち上げました。自分が立ち上がれば、真に柔道を愛している方々に賛同していただけるかもしれない。賛同していただける方々と一緒に手を携えていけば、暴力の根元を断ち切ることができるかもしれない。また時間をかけて行うことで、現場で熱心に柔道の稽古に励んでいる少年少女たちが、堂々と胸を張って「柔道をやっています」と言える日が訪れるかもしれないと考えました。それにしましても、暴力問題はともあれ金銭問題やセクハラなどの不祥事は私の想像を絶するものであったのです。

暴力の根絶には具体的な取り組みが不可欠です。3月12日、私は全柔連の上村会長とこの点について意見交換を行いました。「もし私に任せていただければ、全力を尽くしたい」と申し上げました。以前、私は「柔道ルネッサンス」ということを提唱したことがありました。嘉納治五郎師範が提唱された柔道の原点に立ち返って、人間教育を重視した活動を推進していこうという試みです。こうした運動を展開してきましたので、暴力の根絶が私にもできるのではないかと考えました。上村会長の承諾を得て、3月21日にこのプロジェクトのリーダーに就任することになりました。

その日から、早速メンバーの人選に入りました。私はメンバーの人選こそが本プロジェクトの鍵を握ると考えていました。選考した方々には、なぜこのプロジェクト

ができたのか、時間をかけて熱心に説明しました。サブリーダーは全柔連理事、広報委員長の宇野博昌氏にお願いしました。また、4人の外部有識者の方にメンバーになっていただきました。本日のパネルディスカッションに参加していただく、友添秀則氏(早稲田大学教授)、菊幸一氏(筑波大学大学院教授)、宮嶋泰子氏(テレビ朝日アナウンサー)と、寒川恒夫氏(早稲田大学教授)の4人です。私が常々敬服している方々で、現在日本の柔道界で最も見識の高い方々だと思います。それから、法曹界を代表して弁護士の大作晃弘氏(全柔連理事)、そして女子柔道の視点から北田典子氏(女性柔道指導者)、とりわけ北田氏にはセクハラ問題に向けた分科会を設けて取り組んでいただくことにしています。また、講道館との連携は不可欠で、小志田憲一氏(講道館)に、そのほか加盟団代の代表として落合俊保氏(全日本柔道少年団理事)、本橋順二氏(駒場東邦中学校)、保坂慶蔵氏(福岡県立筑紫丘高校)、吉見浩二氏(高岡法科大学柔道部監督)、栗原孝至氏(東芝キャリア)、松井勲氏(全柔連　大会事業委員長・警察大学校)、遠藤義安氏(東北学院大学NPO法人日本視覚障害者柔道連盟理事)というメンバーでプロジェクトを進めていきたいと考えています。なお、事務局は竹村誠司氏にお願いしました。

「暴力の根絶」プロジェクトを正式にスタートしたのは4月15日のことですが、4月1日には限られたメンバーでプレミーティングを開きました。15日以降は毎回ほとんどのメンバーが出席し議論を重ねてきました。福岡や富山など遠距離の方は一泊することになり大変だったと思います。マスコミの方々の関心も高く、遅くまで取材されていました。

全柔連の全ての理事に我々の考えを理解していただく必要がありますので、毎回の議事録を提出しました。そのことによって、全柔連理事の全面的な協力を取り付けることができたと、私自身は感じています。また、透明性を重視してホームページで公開することも決定しました。とりわけ、外部有識者を交えた議論を大切にしていきたいと考えています。また、可能であればこうした外部有識者を交えた議論やその公開等の取り組みが全柔連のスタンダードになれば、と考えています。

お手許の資料、本プロジェクトがまとめた「暴力根絶に向けて」という資料を見ていただきたいと思います。この資料の骨子は、①柔道及び柔道人のあるべき姿、②暴力の定義、③暴力がおきた場合の処分、④暴力根絶対策の実行――からなっています。これとまったく同じものが6月11日の全柔連理事会に提出され、審議されました。さらに6月25日の評議委員会でも報告され、全ての加盟団体代表者にご理解をいただきました。

簡潔に報告書の内容をまとめると、「暴力の根絶を目指して、ロードマップに則して実行を図る」ということになります。ポイントの一つ目は、暴力の定義を明記したことです。言葉による暴力やパワハラ、セクハラも根絶する暴力の対象としました。二つ目は、どんな小さな暴力でも処分することにしたことです。軽佻な暴力であれば全柔連の加盟団体でも処分できるようになります。これを進めていくには、暴力を受けた者、またはそれを見かけた人が通報しやすいことが大切になります。従って、窓口を複数設けて被害者が容易に告発できるようにしました。こうしたロードマップを作成して、短期あるいは中・長期的に暴力根絶に対応していきたいと考えています。また、暴力根絶のポスターを作成し、全国的な展開を図ることも検討しています。早ければ8月下旬には全国の柔道場、クラブなどに貼って啓発活動を進めたいと考えています。

すでに、加盟団体の一部では暴力の根絶に向けた動きが出ています。全日本学生柔道連盟では、6月22日から23日に優勝大会が開催されます。前日の監督会議ではこの問題に関して90分にわたり議論が交わされる予定になっています。また、秋にも再度この「暴力の根絶」に向けた取り組みに関する会議が開催される予定です。8月17日には中学生全国大会が開催されますが、ここの指導者講習会でも暴力の根絶をテーマに講習が行われる予定です。さらに、7月27日には、600校が集まる日本一大きな大会が福岡県で開かれます。この大会の前日、すべての監督を前に私が「暴力の根絶」をテーマにお話をさせていただきます。このほか、8月のインターハイ、全国少年柔道大会、国体など様々な機会を利用して、私が指導者に暴力の根絶を呼びかけることにしています。なお、セクハラ検討部会は北田氏の提案で5月から立ち上げられ、すでに活発な活動を行っています。

これまでの会議では、暴力を行った指導者あるいは先輩、そういう人たちを処分することで終わるのか、それとも根本的に暴力を根絶するのか、基本的な姿勢を聞きたいという意見が出ました。暴力を無くすためには、長い期間にわたり粘り強く取り組んでいく必要があります。少なくとも、3～5年は継続しないと、真の根絶にはならないというのが我々メンバーの一致した意見です。我々はネガティブな面をなくす活動を進めるだけではなく、柔道の本来の姿、すなわち嘉納師範がめざした柔道、この方向に活動を進めていくことが重要である

と考えています。その教えを啓発し、地道に浸透させていけばおのずと暴力はなくなるはずです。

幸い私自身、暴力を伴った指導を受けたことは一度もありません。それだけではなく、指導者からは人づくり、人間教育の柔道を学んできました。「人生に生きる柔道でなければならない」という指導です。これが私の現在の活動の基本となっています。柔道が人づくり、人間教育である以上、指導者は選手を磨くことも大事だが、己を磨く努力を怠ってはならないと思います。自己研鑽を積まれている指導者に、暴力を振るう人を見たことはありません。牛や馬、象やライオンでも、暴力を使えばそれに従います。私は、暴力は最低の指導方法だと思います。

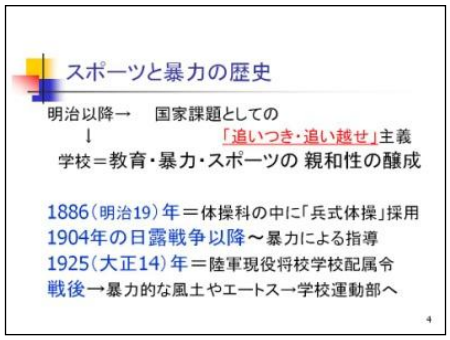
暴力を使った指導方法には即効性があるそうです。しかし、これは選手や子どもたちから考える力を奪います。言葉で指導できない、あるいは自分の感情をコントロールできない指導者は、目先の勝利を人生の勝利と考え違いをしているように思います。教育を軽視して、目先の勝利だけを考える指導が暴力につながります。私が「柔道ルネッサンス」運動を展開している際、「やはり勝たなければ意味がないのではないか」といった質問を何度か受けました。確かに、勝つことは大事です。でも、嘉納師範の目指した柔道は目先の勝利ではなく、人生の勝利です。こうした点についても、本日は会場の皆さまと一緒に考えていければと思っています。

体育・スポーツ界における暴力行為根絶に向けて

友添 秀則
（早稲田大学教授
スポーツ科学学術院長・スポーツ科学部長）

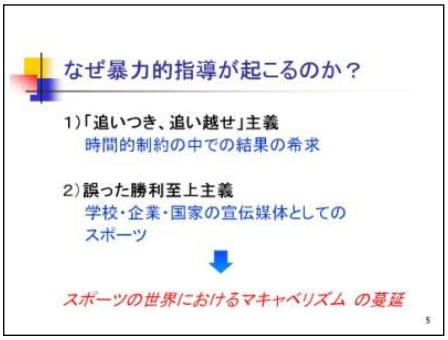
早稲田大学の友添です。大学時代、私は柔道部に所属していました。卒業後は教師になろうと考えていました。大学3年生から4年生になろうとするころ、部員の何人かが県議選の買収投票に関与して問題になりました。このことで悩んだ友人の父親が焼身自殺しました。この問題では、関与した全員が起訴猶予になりました。同じ時期に、今度は後輩が暴力事件を起こしました。これにより柔道部は対外試合を自粛することになります。その時は「自分たちがなぜ悪いのか」が分かりませんでした。授業よりも部活を優先する毎日で、人間形成そのものが疎かになっていたのかもしれません。勝てば何でも許される、稽古だけをしていれば、あとはどうにでもなる。そうした考えに、何ら疑問を持つこともない日々でした。しかし、この時期を境に私自身の中で何かが確実に変わりました。大学院に進み、スポーツ教育学、スポーツ倫理学を学びますが、当時このような研究は誰もしていませんでした。果たして、スポーツは人間形成に有効なのか。本日は、私が研究してきたことを中心にお話したいと思います。

最初に体罰をめぐる現状について述べます。まず、体罰は暴力的指導であると申し上げておきたいと思います。日本は体罰の極めて根強い国です。2013年6月の「大学運動部員への調査」では、部員の約6割が条件付きで体罰を容認しています。2013年春の「高校野球指導者の実態調査」では、指導者の約1割が体罰は必要だと回答しています。さらに2013年3月の「トップアスリートへの実態調査」では、1798人中206人、つまり約1割が暴力を経験しているという結果が出ています。どうも、スポーツ界における体罰（暴力的指導）の現状は根が深いようです。私たちは山下リーダーの下で暴力の根絶を目標に掲げていますが、日本のスポーツ界にはもともと体罰、暴力といった文化があるのではないかという気がしています。

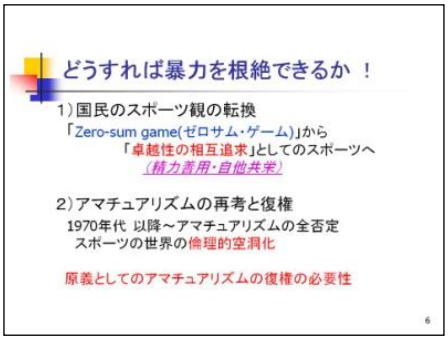


では、いつからスポーツと暴力の関係が始まったのか。その歴史に触れてみたいと思います。実は、学校が大きく関与しています。学校教育を通じてスポーツの親和性を醸成してきたからです。明治以降、日本は国家の課題として「追い付き・追い越せ」主義を旗印にしてきました。その中で学校とスポーツと暴力の

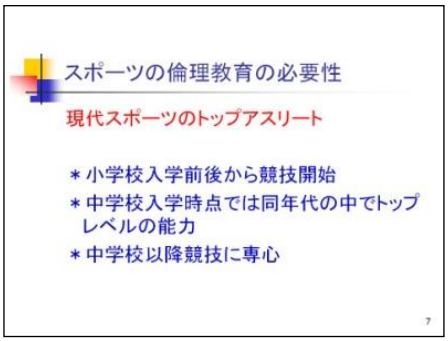
結び付きが生まれてきたのです。1886（明治19）年、体操科の中に「兵式体操」が採用されます。指導したのは軍隊の下士官あるいは下士官経験者です。特に、1904年の日露戦争以降は暴力による指導が顕著になります。「勝つと思うな思えば負けよ」――まるで美空ひばりの歌ですね（笑）。1925（大正14）年には、陸軍現役将校学校配属令というのが発令されます。昭和に入ると、暴力的指導で絶対服従が強いられるようになる。そして、戦後は暴力的風土やエートスが引き継がれ、学校の運動部へ浸透していくようになります。



では、なぜ暴力的指導が起こるのか。先程「追いつき、追い越せ」主義と申し上げましたが、時間的制約の中で結果が求められるようになってきます。すなわち、はやく強くなり結果を出さなければならない。高校の3年間で、あるいは次の五輪までに追いついて結果を出す。暴力は麻薬と同じです。時間的な制約の中で結果を出すには有効で、たまたま火事場の底力が出ることもあります。ただし、その先は燃え尽きたり挫折したりするケースは少なくないのです。もう一つは、誤った勝利至上主義です。進学・就職あるいは学校・企業・国家の宣伝媒体としてスポーツが利用されています。とりわけ国家では勝つことが命題になっています。「勝つ」ことはあくまでもスポーツの結果であるにもかかわらず、それが優先されている。勝つために方法を選ばない。スポーツの世界におけるマキャベリズムの蔓延が、暴力的指導を招いているように思います。



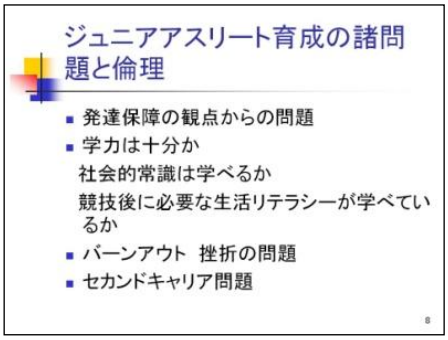
では、どうすれば暴力を根絶できるのか。その一つは、国民のスポーツ観の転換です。私は、これまでのスポーツ観を根底から変えて、強靭なスポーツ観を構築することが大事であると考えています。それには、勝敗というのはスポーツの多様な価値観に過ぎないという意識を持つことが必要です。日本人のスポーツ観は長らく「ゼロサム・ゲーム」でした。相手に勝つことだけがスポーツの根本を支配していました。しかし、約4000校参加する高校野球も、最後まで負けないチームは、たった一校だけです。ゼロサム・ゲームの考え方では、負けることはまったく無意味なことだということになります。でも、スポーツでは負けることが当たり前のことなのです。むしろ、山下先生のように勝ち続けることのほうが奇跡的なことなのです。このことをよく理解しておく必要があります。競技スポーツは、相手と相互に追及し、お互いに卓越していくということが基本理念です。換言すると、より高いものを目指して自分を成長させるということです。相手は敵ではなく、お互いに切磋琢磨していくパートナーである。こういうスポーツ観に転換していくことが大事だと思います。もう一つは、アマチュアリズムの再考と復権です。1970年以降、アマチュアリズムという言葉が消滅し、全否定されようになりました。そのため、スポーツの世界に倫理的空洞化が生じたのです。スポーツの世界を支配していた倫理が、「お金」に変貌して誤った勝利至上主義が蔓延することになったのです。暴力の根絶に向けて私は、原義としてのアマチュアリズムの復権の必要性を感じています。また、指導者や選手にはスポーツの倫理教育が必要だと思います。そして何よりも、フェアプレイの精神とスポーツマンシップの原点に立ち返ることこそが大事だと考えています。



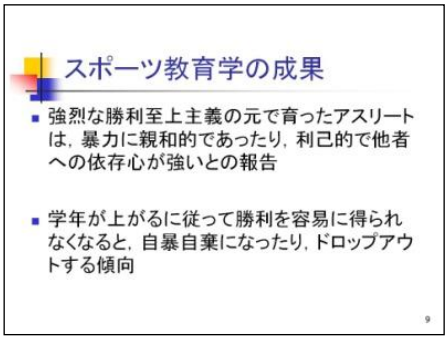
現代スポーツのトップアスリートは、小学校入学前後から競技を開始します。中学校入学時点では同年代の中でトップの能力を持っていなければいけない。最近では、競技歴が偏差値に換算されるようになっています。中学校から大学まで一度も学力試験を経験しない人も珍しくありません。彼らは、中学校以降は競技に専念することが当然のようになっています。

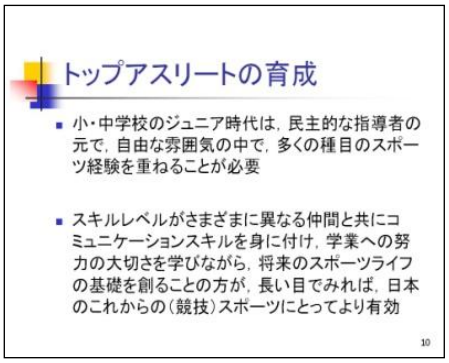
ここにジュニアアスリート育成の諸問題と倫理の問題があります。発達保障の観点からの問題。さらに、学力は十分か、社会的常識は学べるか、競技後に必要な生活リテラシーが学べているか、といった問題。さらに、バーンアウト、挫折の問題。セカンドキャリアの問題など多様な諸問題です。また、自制することの大切さや倫理観を身につけることは、人生の早い時期に浸透させないと厳しい人生を過ごすことになります。我々は、こうした子どもたちの自発性や自律性を促す方策も視野に入れておく必要があると思います。

どんな職業でも、10代にピークが来ることはありえません。人生の中でより多くの経験を積み重ねた後にピークは訪れます。

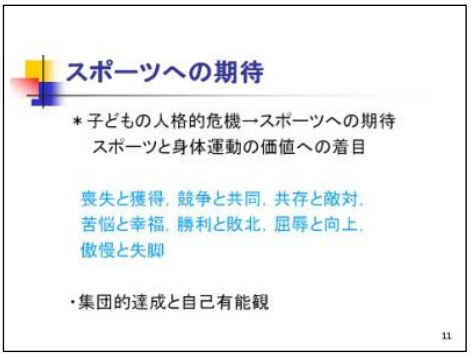


スポーツ教育学からみても、強烈な勝利至上主義の下で育ったアスリートは、暴力に親和的であったり、利己的で他者への依存心が強いと報告されています。また、学年が上がるに従って勝利を容易に得られなくなると、自暴自棄になったり、ドロップアウトする傾向があると言われています。

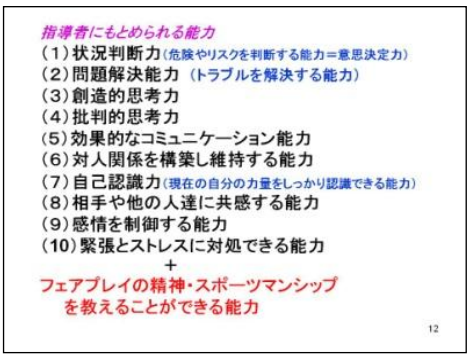




では、トップアスリートをどのように育成するのか。小・中学校のジュニア時代は、民主的な指導者の下で、自由な雰囲気の中で、多くの種目のスポーツ経験を重ねることが望ましいと思います。また、スキルレベルが様々に異なる仲間と共にコミュニケーションスキルを身に付け、学業への努力の大切さを学びながら、将来のスポーツライフの基礎を作ることの方が、長い目で見れば、日本のこれからの競技スポーツにとってはより有効だと思います。

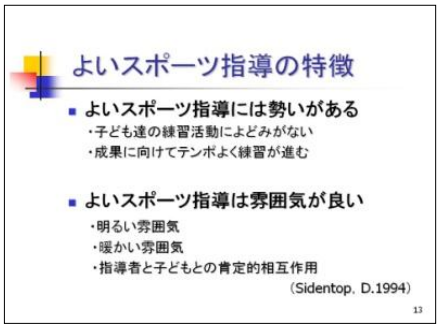


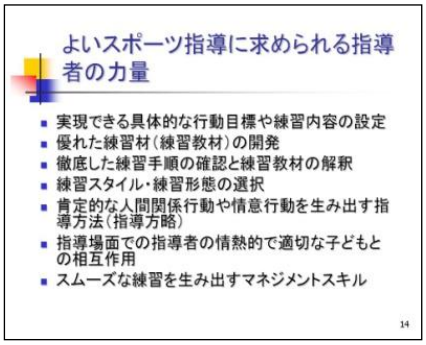
スポーツには、喪失と獲得、競争と共同、共存と敵対、苦悩と幸福、勝利と敗北、屈辱と向上、傲慢と失脚など、人生で経験する多くの葛藤が含まれています。従って、ジュニア時代にフェアプレイの精神・スポーツマンシップを教えることが大事だと思います。これには科学的な指導と指導者の気質ならびに能力が大きく影響します。指導者に求められる能力とは、およそ次のような能力です。



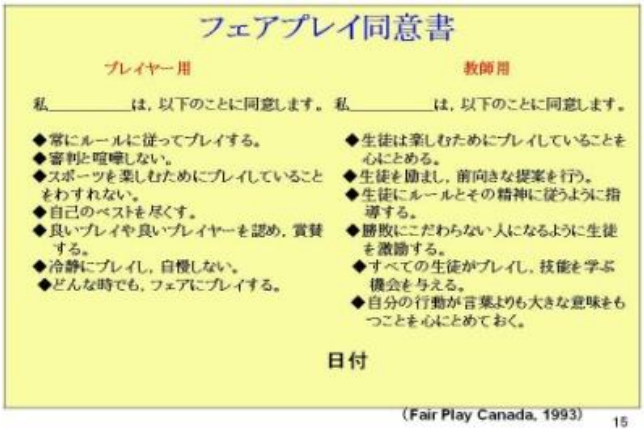
①状況判断力、②問題解決能力、③創造的思考力、④批判的思考力、⑤効果的なコミュニケーション能力、⑥対人関係を構築し維持する能力、⑦自己認識力、⑧相手や他の人たちに共感する能力、⑨感情を制御する能力、⑩緊張とストレスに対処できる能力。これに、フェアプレイの精神・スポーツマンシップを教えることができる能力が加味されたら理想的だと思います。

よいスポーツ指導の特徴は、まず「勢いがある」ということです。子どもたちの練習活動によどみがない。成果に向けてテンポ良く練習が進む。そして、「雰囲気が良い」ということです。明るい雰囲気、暖かい雰囲気。指導者と子どもたちが相互に肯定的に作用している雰囲気が感じられるということです。こうした指導を行うためには、指導者の力量が不可欠です。

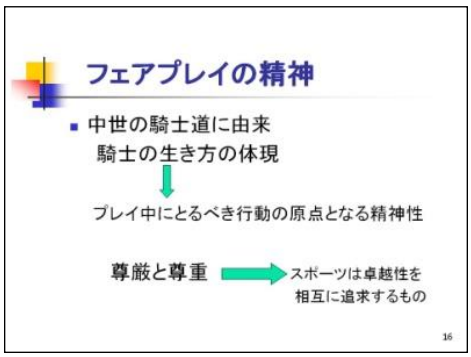




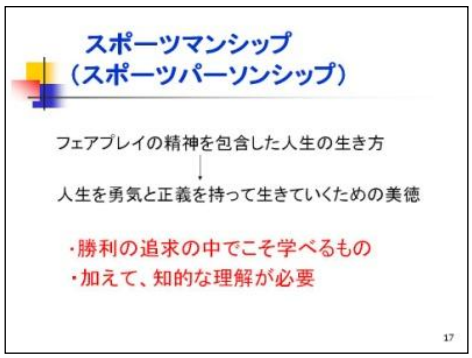
では、その力量とは何か。おおむね、次のような指導ができる人だと思います。①実現できる具体的な行動目標や練習内容の設定、②優れた練習教材の開発、③徹底した練習手順の確認と練習教材の解釈、④練習スタイル・練習形態の選択、⑤肯定的な人間関係行動や情意行動を生み出す指導方法(指導方略)、⑥指導場面での指導者の情熱的で適切な子どもとの相互作用　⑦スムーズな練習を生み出すマネジメントスキル―指導者はこうしたことを常に備えておく必要があります。また、「フェアプレイ同意書」というものがあります。



プレイヤーと指導者が相互に確認しながら、同意書に署名してお互いにフェアプレイの精神を身に付けていこうというものです。指導者は常日頃からこうした準備を進めていく必要があります。



フェアプレイの精神とは、中世の騎士道に由来します。相手の弱みにつけこまない。あるいは正義を重んじるといった騎士の生き方を体現したものです。プレイ中にとるべき行動の原点となる精神性です。全ての尊厳を尊重する心。相手を重んじること。つまり、スポーツのフェアプレイの精神を包含した人生の生き方を、私は「スポーツパーソンシップ」と呼んでいます。



スポーツパーソンシップとは、「人生を勇気と正義をもって生きていくための美徳」だと思います。確かに、スポーツの中で勝つことは最大に追及すべきことだと思います。しかし、勝利の追及の中でこそ学べるものがあります。それがスポーツパーソンシップです。ただし、これには知的な理解が必要になります。暴力ではなく、頭で考えて身につけていくものです。

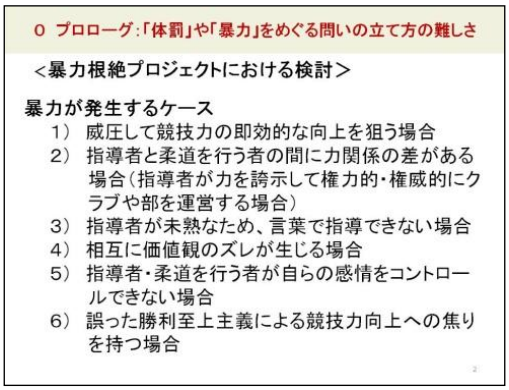
結局のところ、暴力を根絶するために考えられることはフェアプレイの精神・スポーツマンシップを定着させることだと思います。一見遠回りに見えますが、確実で唯一の効果的な方法ではないかと思います。

スポーツにおける暴力発生のメカニズムと根絶の取り組み
―歴史社会的視点から―

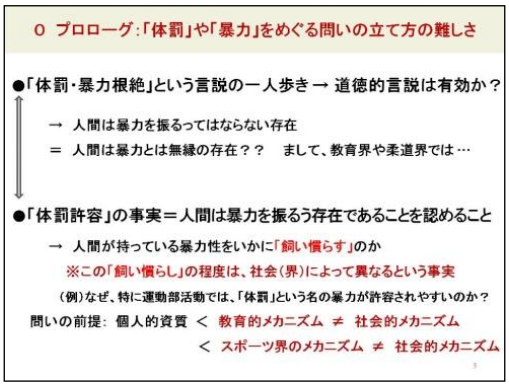
菊 幸一
（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授、同研究科スポーツ健康システム・マネジメント専攻長）

皆さん、こんにちは。筑波大学大学院の菊です。今日私に与えられたテーマは「スポーツにおける暴力発生のメカニズムと根絶の取り組み」ということですが、先程述べられた友添先生のお話の内容と若干重複するかもしれません。副題にありますように「歴史社会的視点」から体罰・暴力の問題を社会がどう捉えてきたかを重点にしてお話したいと思います。

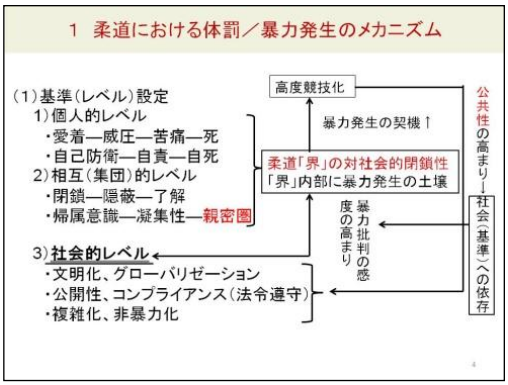
「暴力の根絶」プロジェクトの中で、体罰・暴力をめぐる問題について検討してきました。



暴力が発生するケースには、次の6つのケースが指摘されています。①威圧して競技力の即効的な向上を狙う場合、②指導者と柔道を行う者の間に力関係の差がある場合（指導者が力を誇示して権力的にクラブや部を運営する場合）、③指導者が未熟なため、言葉で指導できない場合、④相互に価値観のズレが生じる場合、⑤指導者・柔道を行う者が自ら感情をコントロールできない場合、⑥誤った勝利至上主義による競技力向上への焦りを持つ場合です。このような捉え方は確かにその通りですが、いざ実行となるとそう単純な問題ではありません。なぜなら、これらが実行されていたら体罰・暴力をめぐる問題が起きなかったことになるからです。

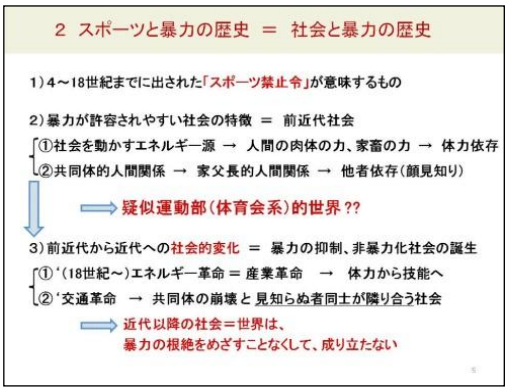


どうも私には「体罰・暴力根絶」という言説が一人歩きしているように思われます。果たして、このような道徳的言説は有効なのか……。いずれにしても、この問題は個人の資質に大きく関与してきます。前提として、「人間は暴力を振るってはならない存在」、「人間は暴力とは無縁の存在であるべきだ」、「まして、教育界や柔道界でそんなことはあってはならん」という道徳的な考え方が存在します。しかし、人間の長い歴史の中で、暴力が根絶された事実は一度もありません。人間は暴力を振るう存在であると認めると、その暴力性をいかに「飼い慣らす」かがテーマになります。この「飼い慣らし」の程度は、歴史社会的な状況によって水準の高低が異なるという事実があります。では、特に運動部活動では、なぜ体罰・暴力が許容されやすいのか。それは、「飼い慣らし」の水準が低いということだと思います。個人的資質が大きく関与すると先述しましたが、私には教育的メカニズムと社会的メカニズムの間に、ある種の乖離があるように思えてなりません。スポーツ界メカニズムと社会的メカニズムもイコールではありません。かつては、それほど隔たりはありませんでしたが、社会的には「暴力なんてとんでもないことだ」という気運になっています。それに対してスポーツ界の内部では、そのような事態をなかなか理解できない状況にある、そんな気がしています。

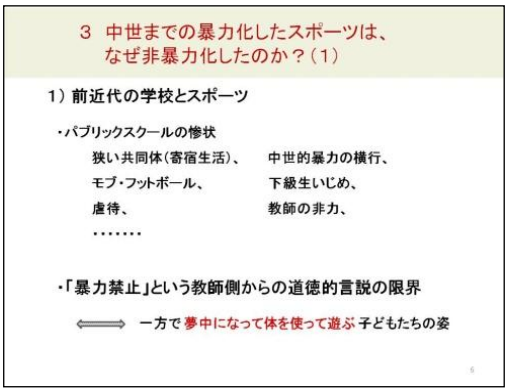


こうしたことを踏まえて、私は「暴力の根絶」プロジェクトに「柔道界における体罰・暴力発生のメカニズム」という案を提出しました。個人的レベル、相互(集団)

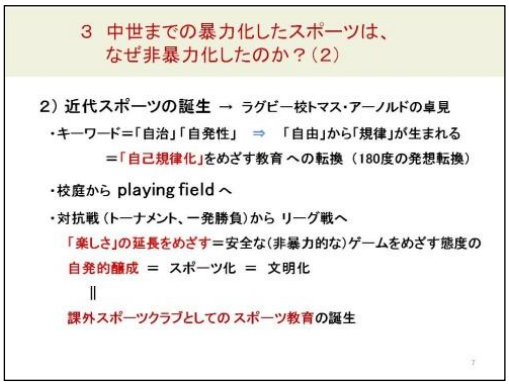
的レベル、社会的レベルの三つの基準レベルを設定して、柔道界の社会的閉鎖性を打破して公共性を高めていくという提言です。これについては後ほど詳しく述べたいと考えています。



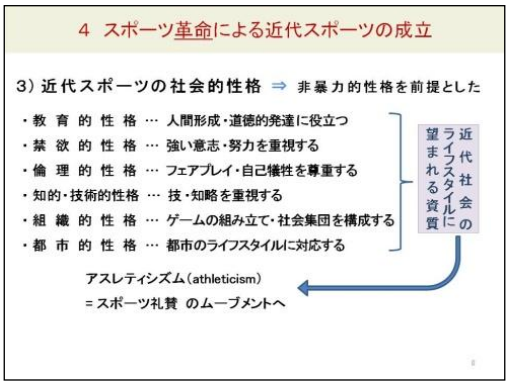
スポーツと暴力の歴史は、社会と暴力の歴史でもあります。先程、友添先生からも歴史のお話がありましたが、私はさらにさかのぼって紹介したいと思います。実は、4～18世紀までに、「スポーツ禁止令」というものが出されていました。例えば、サッカーやフットボールのような野蛮なことはやってはいけないと、時の権力者は考えていたわけです。前近代社会は、暴力が許容されやすい社会でした。その特徴は二つあります。一つは、社会を動かすエネルギー源は、人間の肉体の力、家畜の力であるという考え方です。つまり、体力依存です。もう一つは、共同体的人間関係の中で生活したことによるものです。いわば、疑似運動部（体育会系）的人間関係の世界が前近代にあったということになります。しかし、18世紀の産業革命以降は、社会を動かすエネルギーが体力から技能へと変わります。交通革命で共同体が崩壊し、見知らぬ者同士が隣り合う社会になったのです。つまり、近代以降の新しい社会は暴力の根絶を目指すことなくしては成り立たない社会になったのです。



では、中世まで暴力化していたスポーツが、なぜ非暴力化したのか。前近代の学校とスポーツとの関係を見ていくと、パブリックスクールという存在が重要です。この学校は寄宿生活ですから非常に狭い共同体です。虐待、暴力、いじめなどが横行していました。教師もほとんどが牧師さんで、非力でほとほと手を焼いていました。ですから、「暴力禁止」という教師側からの道徳的言説には限界がありました。一方で、夢中になって体を使って遊ぶ子どもたちの姿があるわけです。そこで、この遊びを通じて楽しいことを延長させようという試みがなされます。



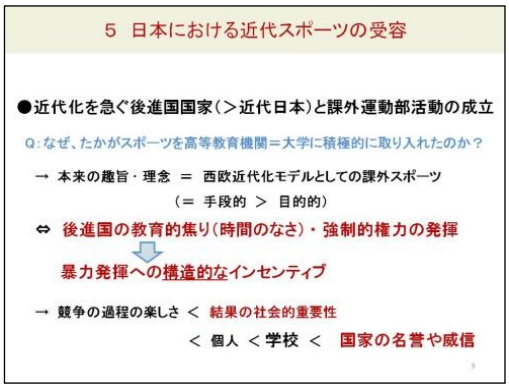
これまで一発勝負だった対抗戦からリーグ戦に切り替えます。これによって「楽しさ」の延長を目指す。同時に、安全な非暴力的なゲームを目指す態度が自発的に醸成されます。ルールを決め、それを守れば、楽しいゲームを続けることができる。



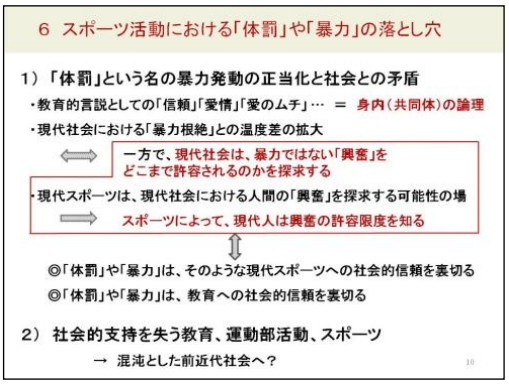
つまり、人間は自発的に暴力の根絶に向かうことを受け入れたのです。これが、課外スポーツクラブとしてのスポーツ教育の誕生につながっていきます。サッカーは手を使ってはいけない競技です。日常生活でこれを求めたら彼らは怒るだろうが、スポーツなら受け入れることができる。そこに「自己規律化」を目指す教育が生まれます。野蛮だったスポーツが教育へと180度発想転換されたのです。スポーツの中で暴力を飼い慣らし、暴力ではない「興奮」を得られる場所を構築したのです。

このことは、スライドに示したように、近代社会のライフスタイルに求められる社会的性格そのものでした。スポーツをよく行う者は、それだけで礼賛されるアスレティシズムの対象となり、そこから社

会のエリートが育成されると信じられました。

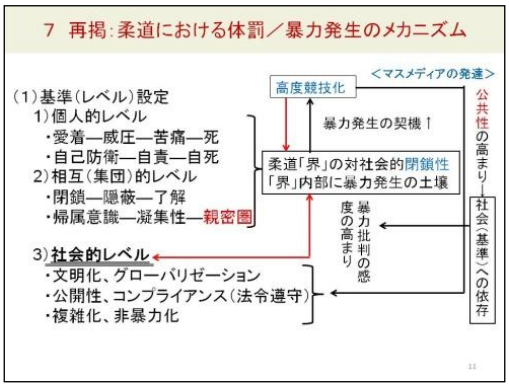


一方で、現代社会は暴力ではない「興奮」をどこまで許容されるのかを探求します。ここに体罰・暴力の落とし穴があります。「体罰」という名の暴力発動の正当化と社会との矛盾。私たちは、暴力の問題を「信頼」「愛情」「愛のムチ」などと言って、身内の論理にすり替えてしまいがちです。また、暴力を肯定すると現代社会における「暴力根絶」との温度差がますます拡大することになります。しかし、スポーツによって現代人は「興奮」の許容限度を知ることができます。ところが、そのスポーツで体罰・暴力の問題が起きれば、社会的信頼を裏切ることに逆転することになります。残念なことですが、社会的支持を失った教育、運動部活動、スポーツは、混沌とした前近代化社会への逆戻りをたどることにならざるを得ません。



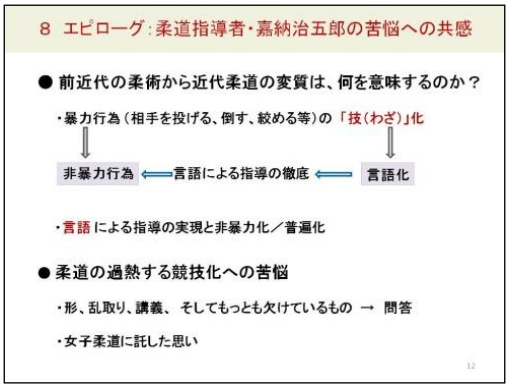
スポーツが高度に競技化すると、勝利や技術習得に夢中になるあまり、閉鎖的になってしまいます。この閉鎖性が前近代的な暴力を生む土壌をつくるのです。

ここで先程、紹介しました「柔道における体罰・暴力発生のメカニズム」の提言について少し付け加えさせていただきます。柔道界は体罰・暴力の発生について社会的責任を果たさなければならないわけですが、個人的レベルと相互（集団）的レベルの親密性あるいは閉鎖性と、社会的レベルのメカニズムとの相反する矛盾した内容をどう受け入れるかが重要な課題になります。柔道あるいはスポーツ界が社会的レベルの「非暴力化」をどう受け止めるのか。そのためには、親密性、閉鎖性を自らが打破するしかないのです。今後は、様々な分野の第三者の意見を集約して、水準を高めていく努力が大事だと思います。

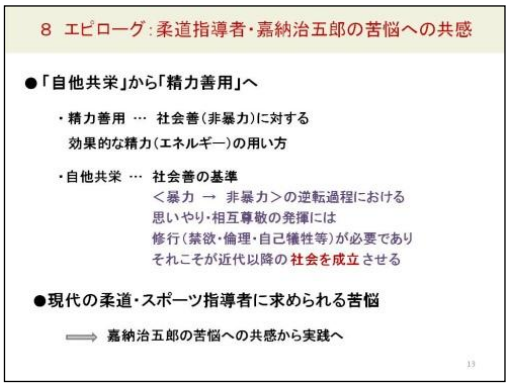


最後に、柔術から近代柔道を築き上げた嘉納治五郎師範の苦悩について紹介したいと思います。実は、嘉納師範はパブリックスクール時代のスポーツと同じようなことに着手しています。

柔道はもともと暴力行為（相手を投げる、倒す、絞めるなど）であるとして、これを「技（わざ）」化し言語化して言葉による指導を徹底させ、暴力行為を失くそうとしました。言語による指導ですから、こうしたカタチが普遍化していきます。ここに教育による柔道の原点があります。また、晩年の嘉納師範は過熱する柔道の競技化に苦悩し警鐘を鳴らしていました。形、乱取り、講義、そして最も欠けているものが「問答」だと語っていました。試合の結果だけにこだわるのは「けしからん」というわけです。そして、



こうした思いを女子柔道に託したのです。



嘉納師範が提唱した言葉に「自他共栄」があります。相手を助け、高め合い、互いに栄えるという意味です。もう一つの指針として「精力善用」という言葉を掲げました。これは、その力を使って相手をねじ伏せたり、威圧したりすることに使わず、世の中の役に立つことのために能力を最も効果的に使いなさいという教えです。心身のエネルギーを最も効果的に、社会善（非暴力）のために用いる。嘉納師範の考えは、まさに現代の柔道・スポーツ指導者に求められる言葉だと思います。嘉納師範の苦悩への共感から、実践へ。いまこそ柔道指導者は、「精力善用」を実践していく必要があるのではないかと思います。

総合討論（パネルディスカッション）

コーディネーター：宮嶋　泰子

【出席者】山下　泰裕・友添　秀則・菊　幸一

宮嶋　全柔連の「暴力の根絶」プロジェクトでどのようなことが行われ、そしてなぜ日本のスポーツ界に暴力ということが付きまとってきたのか、さらにどうすればそれを根絶できるのか。三人の先生方に基調講演をしていただきました。皆さんもいろいろと感じられることがあったと思いますが、スポーツの中に暴力性というものが内包されているのではないかということを改めて思い知りました。では、これをなだめさせるには何が必要なのか。今、柔道にとってそれがどんな意味を持つのかを考えてきました。まず、なぜ日本のスポーツ界に暴力がなくならないのかという問題です。一つは国民のスポーツ観を転換する必要があるということ。もう一つは、倫理的空洞化を止める必要があるということが出てきたように思います。ただ、これは容易なことではないと思いますが、友添先生いかがでしょうか。

友添　厳しいですね。そんなに簡単に暴力が根絶できるとは誰も思っていません。ただし、これは言い続けていかなければなりません。このままこの問題が繰り返し起きると、たぶん10年後、20年後には違う種目で同じような問題が発生する危険性があります。一番大きな問題は、スポーツは社会的支持を失うと、根本的に存立しないということ。東日本大震災の時に、いろいろなアスリートが「今、何ができるか」ということで立ち上がりました。私が痛感したのは、「衣食が足りないでスポーツを行うことは困難である」ということでした。逆に言うと、社会の支持なくしてスポーツは存立しないということです。とりわけ、柔道では猛者だけが残って、切った張ったの世界だけが残るということです。先程、菊先生から近代スポーツの歴史についてのお話がありましたが、まだ２００年とその歴史は浅い。スポーツの世界はそれほど強靭な世界ではなくて、極めて脆弱で私たちが守り育てていかなければならない世界です。これは、国民的スポーツである柔道にも同じことが言えると思います。

宮嶋　菊先生のお話の中で印象に残ったのは、「元来、スポーツには暴力性が内包されている」という指摘でした。ではこれをなだめるには何が必要ですか。

菊　通常の発想だと「これをしてはいけませんよ」ということになると思いますが、先程パブリックスクールの例でお話したように、基本的にはスポーツは「プレイを楽しむ」ことに意義があると思います。このプレイというのは、結果を重視しないで個性を重んじてプロセスを楽しむことです。

宮嶋　今の社会は結果を求めがちですね。プロセスを楽しむとは、具体的にどういうことですか。

菊　例えば、中世の英国に「狐狩り」というものがありました。これは、鉄砲でズドンと撃てばそこでおしまいです。ところが、わざわざ猟犬を使って人間がコントロールしてぐるぐる回りながら狐を追いかける。つまり、クリケットのようなもので、なるべく時間をかけてゆっくりとその時間を味わう。そういう文化です。このように、わざわざ困難な課題を、あるいは偶然性に左右されることも含めて受け入れることが、近代スポーツを誕生させる要因になったと言われています。

宮嶋　つまり、結果を求めるのではなくプロセスを楽しむということですね。

菊　サッカーにオフサイドというルールがあります。どうしてあんなルールを作ったかといえば、ゲームを瞬時に終わらせない工夫だと思います。また、ラグビーはなぜ後ろ人にボールをパスするのか。やはり、ゲームのプロセスを楽しもうとした、当時の人たちの発案だったのではないかと思います。

宮嶋　山下さんは、今のお二人の意見をお聞きして、どのように思われましたか。

山下　大変勉強になりました。私も大学で教えている立場ですが、これほど興

味を感じたことはないですね。先程の菊先生の講演の中で、「閉鎖的な柔道界の体質を打破しない限り未来はありえない」というお話がありました。私どものプロジェクトでは、透明性を高めるために、議事録を公開することにしました。またメンバーに外部有識者の方に加わっていただきました。こうした試みはこれまでなかった。当初、外部の方と加盟団体代表者の間には意見の食い違いも見られました。しかし、一人一人が真剣に意見を重ねていくうちに、おぼろげながら取り組みへの道筋が見えてきたように思います。先程も述べましたが、できればこうした流れを全柔連のスタンダードにしていきたいと考えています。また、菊先生のお話の中に嘉納師範の「問答」が大事だということが出てきました。私が子どもの頃は、稽古の前に必ず指導者から柔道の基本を教えるお話があったものです。言葉で伝える努力なしに、勝利だけを期待するのは、ある意味で指導者の怠慢だと思います。そうしたことも見直す必要があります。

宮嶋 その子どもの頃の指導で、覚えていることがありますか。

山下 いろいろありますが、中学生時代に先生から「この中から日の丸を背負った選手が出れば嬉しいが、競技人生はそんなに長くはない。ここでやっていることや学んだことが日常生活に生かされてこそ柔道なんだぞ」と教わりました。今、私が望んでいることも「人生の勝利者」になることです。中学生という多感な時に教わった言葉は、ものすごく心に残ります。ところで、友人から問われて困ったことがある。「一人一人の人間教育も大事なことだが、畳の上に上がったら勝負に集中するのではないですか？」と。確かに、私自身も相手を親の敵と思って向かっていったことがあります。ただ、畳から降りたら相手も同じ仲間なんだと、その切り替えが大事だと思います。ヘーシンクやラシュワン選手の話を交えて外国でよく話すことですが、「柔道は決して格闘技でない。相手を重んじるスポーツなんだ」と。ロサンゼルス五輪での私とエジプトのラシュワン選手との決勝戦は海外でも印象に強いものですから、よく理解していただいています。

宮嶋 今お話を拝聴していて、ふと山下少年の写真を思い浮かべました。みんな座っている中で、一人だけ立っている。全員小学生なのに、山下さんだけ上半身一つ大きかったという印象があります。

山下 上半身一つは大きくなかった(笑)。でも、頭一つは抜けていましたね。

宮嶋 山下さんは、学校の先生や指導者に恵まれて本当に素晴らしい道を歩んで来られたと思います。菊先生が言われた「閉鎖性」をどうするのか。これがスポーツ界に課せられた一番大きな問題ではないかと思います。私たちはよく「原子力村」といった表現をしますが、それと似たような「スポーツ村」という考え方がどこかにあって、その中で体罰や暴力が一つの文化にまでなっている現状があります。先程、山下さんから外部委員のお話がありましたが、それは「村」の中、つまり同質の中に異質のものを入れていく試みだと思いますが、その点についてはいかがですか。

山下 私自身は柔道を通じて人間教育を図っていくという一貫した考え方に立つものですが、現在の柔道界ではそう簡単には理解されないと考えました。社会の常識と乖離した中で、やはり透明性を図ることが重要だと考えました。全柔連の身内だけで進めていくには限界があります。

宮嶋 社会一般の常識と乖離している。その常識を戻していくことが大事だという認識でよろしいのでしょうか、菊先生。

菊 構造的な問題があって、それを一人一人の意識で変革していけばいいのですが、1プラス1が3の方向になってしまうところに問題がある。なぜ、スポーツが集団的に閉鎖的になるかというと、例えば、勝つことだけで目的が達成されてしまうからです。プロのサッカーは入場料で組織が成立するため、社会的ニーズということを絶えず意識しています。つまり、社会が何を求めているか、その答えは社会としっかりと向き合うことで成立しています。プロの世界はみんなそうですね。長い間、アマチュアということでやってきた組織がいきなり社会の荒波に揉まれると、どんどんレベルを高くしていく必要に迫られます。そのとき、必ずこのような閉鎖性の問題が生じる。社会的ニーズがあって初めて組織が成立するということであれば、暴力の問題であれ何であれ、社会の要求にきちんと応えていかなければなりません。ここがこの問題の重要なポイントだと思います。

宮嶋 暴力が生まれる原初は、そんな具合なのかと思います。ところで、間もなく世界水泳が始まります。スペインのシンクロのコーチがロンドン五輪の直前で替わりました。なぜかというと、彼女はこれまでいつも2位だったのでバルセロナで行われる世界水泳では、絶対に金メダルを獲りたいと思っていたようです。物凄いプレッシャーを感じて、選手にうつ病の薬を強要して飲ませ高揚感を持たせた。フィンランドのクロスカントリーでも自国開催の世界大会でチームぐるみのドーピング違反が明らかになった。いずれも同様のプレッシャーが原因です。水泳のイアン・ソープ選手のうつ病の問題や、イングランドのプロサッカー選手協会会長が猛烈なプレッシャーにさいなまれ、何度も自殺を図るといったことなど、様々なこ

とが現実に起きています。ある意味で現代社会においてスポーツは極限に近いところに来ているのではないか、ということを感じています。でも、やはりスポーツが見失ってはならないものがあると私は思いますが、友添先生はこの点についてどうお考えですか。

友添　集団の質の問題ですね。現代スポーツは、薬物ドーピング、中絶ドーピングを経て、血液ドーピングがほぼ終焉し、遺伝子ドーピングの時代に入っていると言われています。ここで皆さんに質問です。「この紙の色は何色に見えますか？」――「黒ですね」。例えば、これを山下先生も菊先生も「黒」と答え、宮嶋さんが「白」と答えたとします。スポーツの世界では、少数者が異常者になる。これがメンタルな面になると、等質集団の中ではその少数者を許さない状況が出てきます。こうした危険な状態が簡単に発生する。自分たちの集団の中で「善」だと決めてしまうと、一般社会の常識に気付かない状況が醸成されてくる。ですから、異質なことを認め合うとか多様なことを認め合うような状況に変えていく必要があるということです。これは民主主義の原則でもありますから。例えば、野球のゲームで金持ちと貧乏人に格差があるかといえば、それはありません。貧乏人だから打順が回って来ないということはないはずです。こうしたフェアプレイの精神、スポーツマンシップの原点にスポーツは立ち返ることが大事だと思います。

宮嶋　本来、スポーツは人間にしかできないものですので、ある意味人間性が最も現れやすいと思います。それなのに、それをないがしろにするような不祥事が相次いでいる。何かがねじれておかしくなっていると思わざるを得ない現状です。ある人が「全柔連は下から上へモノを言えないところですよ」と語っていましたが、山下さん本当のところはどうなのでしょうか。

山下　確かに、言いにくい雰囲気はあります。ですから、透明性を持たせて公開したいと思っているわけです。さきほどプレッシャーの問題が出されましたが、指導者が自分のことだけを考えてしまうと息が詰まってしまいます。そうではなくて、どうやったら選手たちの希望をかなえてやれるかを真剣に考えていけば、プレッシャーへの対応も違ってくると思います。誰にだってプレッシャーはあります。でも、指導者は選手たちに全身全霊を傾注して全力を尽くすことが第一義なのだと思います。自分ことや目先のことばかり考えてしまうといろいろな問題が生じてきます。自分を見失ったときは、腹をくくった方が良い。私自身の経験からも、開き直ることで物事が冷静に見えてきます。

宮嶋　友添先生の講演に出てきた「フェアプレイ同意書」は、非常に面白いと思いました。教師用とプレイヤー用が一枚の紙になっているわけですが、プレイヤーと指導者の関係はどんなカタチが望ましいとお考えですか。

友添　プレイヤーと指導者の関係はあくまでも対等の関係で、フレンドリーな関係だと思います。もちろんその中にはリスペクト（尊厳）も含まれます。もともとフェアプレイは中世の騎士道から発生したものです。例えば、私と山下先生が馬に乗って闘うとします。山下先生が肩の半分を骨折したら、私も同じように肩の半分を骨折する。また相手が刀を落としたら、自分も刀を落とす。馬の足が折れたら、こちらの馬の足も折る。つまり、対等であるというカタチがフェアプレイの原点なのです。これにのっとってお互いにその精神を確認し同意するというのが「フェアプレイの同意書」です。言い換えると、お互いに信頼感を確認し合うということだと思います。

宮嶋　日本ではプレイヤーと指導者が対等であるというと、「えっ」と思われる人も多いと思います。が、そのことが同質で「村」的な者が集まる温床になっているということも考えておかなければならない問題だと思います。さて、会場から質問が届いていますので紹介します。「科学的にも発展を遂げている日本で、なぜ体罰などといったことが起きるのか。また、そのことは日本人的気質と何らかの関連があるのか」という質問ですが、これについて菊先生はいかがですか。

菊　よく国民性とか日本人的気質とか言われますが、私はそういう立場には立ちません。例えば、江戸２６０年の平和の時代に、なぜ竹刀剣道が生まれてきたのかを考えてみていただきたい……。個人と社会という関係や全体環境との折り合いの中で文化というものが生まれてきます。現代スポーツは、一般社会が求めている基準と勝利へのプレッシャーが矛盾した状態になっている。これを何とか是正しなければなりません。人間が社会を構成している以上何らかの因果関係はあると思いますが、それは日本人だからどうだとかということではない。共通のメカニズムがあり、それは人類共通のものだと思います。

宮嶋　「長いものに巻かれろ」「付和雷同」など、いろいろ言われますがスポーツは一人一人が個人で行っていくものですから、やはり一人一人が考えていく問題だと思います。

　会場からの次の質問ですが、「暴力を与えた指導者を排除するのか、それとも暴力そのものを根絶するのか。果たして、言葉で十分な指導が可能なのか。あるいは、根絶する具体的な案がしっかりと出ているのか」という内容です。指導

者資格といった制度もスタートしますが、具体的な取り組みについて山下さんからお聞かせください。

山下 指導者資格がスタートしますが、これはまだ十分ではないと考えています。ところで私は、人間は変われると信じています。江戸時代の最後に明治維新が起きたぐらいの意識の変革がないと柔道界の暴力根絶はできない。とりわけ、上に立つ人はその覚悟が必要だと思います。あれは駄目、これは駄目といった考え方ではなく、我々が目指す柔道の崇高な理念は何であるのか、きちんと理解して実行する必要がある。先程来言われているように、指導者の未熟さ、誤った至上勝利主義も大きな要因ですが、一番大事なことは柔道根本の意識の変革だと思います。暴力には厳しく対処していきたい。様々な人から真摯に意見を聞いて、暴力を断ち切る英知をプロジェクトに反映させていきたい。

宮嶋 おそらく、ここにお見えの方は柔道に接している方が大半だと思います。嘉納治五郎師範は、その柔道を実に理論的に物理的に解析され、今日に伝えた人物であったと思います。

友添 嘉納師範ほど柔道を合理的かつ理性的に伝えた人はいません。柔道の隅々に近代物理学が応用されています。最小で最大の効果を上げるという考え方は哲学にも通じるものがあります。あの時代に一番良いカタチで柔道を理論化し、言語化した。それだけの大仕事を20代で成し遂げたということは実に驚くべきことだと思います。

宮嶋 そうした言語化による指導を失ったことが、今回の一連の問題の発端となったと思います。柔道の大本を失ったと思いますが、山下さんはいかがですか。

山下 同感です。講道館に出向くたびに「ここに嘉納師範の精神が宿っている」「先生の崇高な理念はどこへ行ってしまったのか」と思う。我々は、目先の結果を求めすぎたゆえに、嘉納師範が提唱された目的を忘れています。特にリーダーが率先して原点に立ち返らなければ、閉鎖的な集団を開かれた集団に変えることはできないと思います。東海大学柔道部の監督として、学生に1時間ほど暴力根絶の必要性を訴えたことがあります。それでも2割ほどの学生は、「体罰は精神をたくましくするために必要だ」という考えを持っていました。こうした長い間の経験に伴う考え方は簡単に打破できるものではありませんが、粘り強く意識を変えていくことが大事だと思います。

宮嶋 まだ、暴力を肯定する人がいる……。実は、このプロジェクトで私から一つだけお願いしたことがあります。それは、なぜ暴力がいけないのか明記してほしいということでした。なぜ、体罰や暴力がいけないのか？ この暴力の中には、言葉による暴力やセクハラも含まれます。私の知っているある女性選手は、高校時代に「お前なんか死んでしまえ」と言われ続けてきたそうです。そのため、人間不信に陥りました。50歳になった今でも恐怖を感じるそうです。これは一例ですが、暴力を振るうということは相手の人格までも破壊してしまうということです。

友添 中学・高校での運動部の記憶が、トラウマというカタチで生涯忘れなれないケースが見られます。最もたちが悪いのは、やった方の記憶には残らず、やられた方の記憶に残り続けることです。暴力指導は人を死に至らしめることもあります。先程、「麻薬」という言葉を使いましたが、暴力だけではなく、ある意味ではこうした行為も麻薬です。

宮嶋 無我夢中になればなるほど、人は暴走します。だからこそフェアプレイの精神が必要なのだと思いますが、菊先生いかがですか。

菊 近代スポーツは、わざわざ「手を使うな」とか「ボールを前に投げるな」というルールを加えてきました。つまり、自らコントロールすることに楽しむことを見出したわけです。つまり、苦しさと楽しさは相反するものではなく、両立できるものだと考えたわけです。問題は、どこまで苦しさと楽しさのバランスを許容できるかということだと思います。こうした近代スポーツが確立したことで、我々は様々な恩恵にあずかってきたわけですが、そのスポーツのカタチを次世代にどう受け継いでいくかが大きな課題になると思います。いま、そのバトンタッチが正念場を迎えているのだと思います。

宮嶋 山下さん、ここまでお話を聞いた感想はいかがですか。

山下 選手時代も監督時代も、私への「金メダル」への期待は大きかったが、それが重圧にはなりませんでした。ただ、私自身が金メダルを獲りたかった。監督時代は、一人でも多くの選手に夢を実現してほしかったと思います。その気持ちを何よりも大事にしていました。自分中心の考え方や、周囲の重圧を気にするのではなく、「自分がこうやりたいんだ」という考えに変われば、勝利至上主義に伴う過度な重圧はなくなるはずです。

〈会場からの意見〉 上下関係で成り立っている組織はやめていただきたい。特に女子柔道にはこのことが顕著だと思う。

宮嶋 私も同感です。

山下 先程のお話にもう一つ付け加えると、柔道に励むのは「人生を豊かにするため」であるという捉え方です。先日、ある取材を受けました。現役を引退して指導者になったころの私の夢は「子ど

もたちが柔道着を肩に背負って道場に行くことに憧れを抱くこと」でした。「それが夢だった」と話すと、「どうして過去形なんですか」と言われました。なるほど、自分の夢はここ10年間、私の脳裏から抜け落ちていたのです。そして、柔道界がこうした危機的状況だからこそ、改めて「人生を豊かにする柔道」という自分の夢を果たさなければならないと思いました。

宮嶋　モスクワ五輪の時に、私は山下さんの恩師である佐藤宣践コーチに取材したことがあります。そのときの「畳の上では山下は一人。山下が自分自身で考え、行動できる選手に育てたい。私の手を離れることが私の理想だ」と語られたことが強く印象に残っています。スポーツの自発性とはそういうことですね。

山下　そうですね。最後の全日本選手権で、佐藤先生はあえて自分から離れようとしました。そして祝賀会の席上では「今日、私の夢が現実になった。山下は一切私にアドバイスを求めず、自分の力を出し切った」と。やはり、スポーツには自発性、自律性ということが大事だと思います。指導者は、目前の勝利にこだわるのではなく、自発性、自律性を育むことを大事にしてほしいと思います。

宮嶋　今回、女子柔道選手の告発問題に端を発して様々な不祥事が明らかになりました。これは平等性や、不平等性、あるいはコーチとの上下関係、更には言論の自由が選手側にないことなど、様々な問題提起が投げかけられました。

先日、私は安藤美姫選手をインタビューしました。いろいろなことを吐露してくれましたが、「私は普通の女の娘です。みんなが部活するようにフィギュアをしてきただけなのに」――それが強くなった途端に、あれをやっても駄目、これをやっても駄目。どうして、こんなことを言われなければならないのか？

――これは至極当然なことだと思います。彼女は選手になるために生まれてきたわけではありません。しかし、日本のスポーツ界は強い選手を特別視してしまう傾向があります。それは、どこか歪んだ考え方ではないかと思います。さて、予定の時間を過ぎてしまいました。では最後に、皆さんと一緒に「日本のスポーツ界を変えていこう」と大きな声でご唱和して終了したいと思います。『日本のスポーツ界を変えていこう！』ありがとうございました。

＊　＊　＊

柔道教育ソリダリティーのバックナンバー講演録をご要望の方は、事務局０４６３(58)1211(内線3524)までご連絡下さい。講演録は、無料で配布しております。また、ホームページからもダウンロードすることが出来ます。【http://npo-jks.jp】